



TITLE:

地域研究統合情報センター要覧, 2016

AUTHOR(S):

CITATION:

地域研究統合情報センター要覧, 2016. 地域研究統合情報センター要覧
2016, 2016: 1-13

ISSUE DATE:

2016

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/227210>

RIGHT:



2016

京都大学
地域研究
統合情報センター



目次	共同利用・共同研究拠点としての活動・	3
	CIAS 共同研究プロジェクト・	5
	地域情報学の構築	7
	スタッフ	9
	出版物	11
	図書室・京セラ文庫「英国議会資料」・	12
	情報発信	13



京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）は2006年4月に創設され、①地域横断的な相関型地域研究の推進、②地域に関する情報資源共有化システムの開発、③情報学を応用した地域情報学の構築をミッションに掲げた研究を推進し、2010年度には「共同利用・共同研究拠点」となり、10年が経過しました。この4月に「地域研究統合情報センター創立10周年記念祝賀会」を挙行了いたしました。これは、学内関連部局、大学本部、人間文化研究機構、文部科学省、とりわけ地域研究コンソーシアムを始めとする地域研究コミュニティの皆様の長年にわたるご支援のおかげです。改めて御礼申し上げます。

国境や文化圏を越えるヒト・カネ・モノ・情報の量・速度が増大している今日、一地域の変動は直ちに周辺地域あるいは全世界に容易に波及します。現代の地域研究は、グローバルとローカルをリンクしながら地域をデザインする学問への脱皮を迫られています。そのためには、比較を通じて地域の特性を把握するとともに、各地域がどのように関わりあいながら世界を構成しているかという研究の視点が重要です。この「比較」と「関係」をキーワードとした地域研究が「相関型地域研究」であり、多様な分野の研究者による共同研究が不可欠です。

地域研究統合情報センターは、共同利用・共同研究拠点として、2013年度より『『地域』を測量（はか）る：21世紀の『地域』像』など4つの研究主題のもとで、公募制の共同研究を推進してきました。2015年度には計25件の共同研究を実施し、のべ200名以上の共同研究員が参加しました。こうした共同研究の成果として、CIAS叢書の継続刊行、CIAS叢書サブシリーズとして京都大学学術出版会から「情報とフィールド科学」ブックレット3冊、青弓社から「相関地域研究」2冊、京都大学学術出版会から「災害対応の地域研究」2冊を刊行しました。さらに地域研究統合情報センターは、地域研究関連組織が加盟する「地域研究コンソーシアム」の事務局として、プロジェクトの公募情報、シンポジウムや研究会の案内、関連組織の活動状況などを内容とした「地域研究メールマガジン」を毎週配信するほか、年次大会のサポート、雑誌『地域研究』の刊行などを担い、地域研究コミュニティの発展に貢献しています。各組織の協力の結果、加盟数は2004年度発足時の46組織から97組織へと拡大しており、今後の改革を経て、さらなる展開が期待されています。

また、地域研究統合情報センターは、「情報資源共有化システム」の開発を進めています。地域研究に関わる資料は文字・画像・動画・音声など多様であり、しかも複数の研究機関に分散して所蔵されています。このような研究資料を情報学の手法を用いて知識として統合し、研究者をはじめとする地域に関わる人々の利用に供する研究が「情報資源共有化システム」の開発です。地域研究統合情報センターでは、所蔵資料を中心として多様な資料のデータベース公開を進めています。また、その過程で蓄積されたデジタル化やデータ作成に関する経験の共有を講習会等により進めています。さらに、ネットワーク上に分散している研究機関のデータベースの統合と共有化を目指した「地域研究資源共有化データベース」を公開しています。現時点で、地域研究統合情報センター、京都大学東南アジア研究所、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館、ハーバード大学イェンチン図書館の計52データベースの共有化を実現しており、地域研究においては最大規模のデータベース連携と言えます。





さらに、地域研究統合情報センターは、情報資源共有化システムに蓄積された知識を相関型地域研究に応用する情報学的手法の研究である「地域情報学」の先端研究を進めています。相関型地域研究と情報システム開発の成果および2009年度末に実施した外部評価に鑑み、2010年度より「地域情報学プロジェクト」を発足させました。研究成果のデータベース公開を支援するMyデータベース、それを利用した災害復興マッピングデータベースの公開やフィールドノートマルチメディアデータベースの公開など、地域情報学の成果が深化・開花する時期を迎えています。

地域研究統合情報センターは、こうした共同利用・共同研究拠点としてのミッションの着実な展開と、京都大学が掲げる「先端的、独創的、横断的研究」を積極的に推進し、2015年度に実施された共同利用・共同研究拠点の期末評価において「A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される」という評価を得て、第3期中期目標期間においても拠点としての機能を継続できることになりました。これにあわせて、地域研究統合情報センターの強みと特徴を活かした、新しい達成目標を明確化しつつあります。

相関型地域研究においては、「ラテンアメリカ研究ハブ形成事業」を発展させた「環太平洋研究ハブ形成事業」を立ち上げました。これは、アメリカ大陸を出発点にオセアニアまで視野を広げるとともに、京都大学で蓄積されてきた東南アジア、東アジア、ユーラシアに関する研究活動と連携することを目指した野心的な地域研究を模索するものです。地域情報学においても、サイバー空間やクラウドやビッグデータなど、急速な進化と変容を遂げているネットワーク社会に対応した次世代地域研究データベースの構築を目指しています。そのために、セマンティックWebやテキストマイニングや人工知能などの最新技術を駆使した応用研究を、学内関連部局との連携のもとで開始しました。研究センターとして、また共同利用・共同研究拠点として、学術への貢献と社会的責務をスタッフ一丸となって果たす所存です。

このように地域研究統合情報センターは、情報システムのネットワークと共同研究に関わる人々のネットワークに支えられて、共同利用・共同研究拠点としての責務を果たすとともに、独創的な地域研究を展開してまいりました。他方、大学や研究センターを取り巻く環境は厳しさを増しています。その中においてさらに発展していくためには組織の強化が必要と判断し、2016年度中の東南アジア研究所との統合を決断いたしました。現在その準備を進めております。両センター・研究所の研究資源を効果的に運用し、それぞれの成果と強みをさらに発展させていくだけではなく、シナジー効果による新しい研究課題の展開を目論んでおります。地域研究コミュニティの皆様の地域研究統合情報センターに対するご助力とご協力に感謝申し上げますと同時に、新研究所への皆さまのご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。

2016年9月
地域研究統合情報センター
センター長 原 正一郎





共同利用・共同研究拠点としての活動

地域研究は、世界が直面する諸課題に対して、現場の事情に即して学術研究の立場から対応しようとする学問分野です。多くの地域研究者は特定の国や地域の事情に精通し、その国・地域を通じて世界を捉えようとしています。

その一方で、地域研究には、国・地域を越えた比較や意味づけに工夫を要するという課題があります。この課題を乗り越えるため、既存の学問ディシプリンと組み合わせて地域横断的な比較を行う方法などをとり入れてきました。

CIAS は、共同利用・共同研究拠点として、地域研究が特定地域の研究に埋没しがちであるという課題を解消するため、地域の違いを越えて研究者、地域研究情報、研究機関をそれぞれ連携させる取り組みとして、次の3つを柱とした研究活動を行っています。

1. 共同研究プロジェクトの推進

現代世界が直面する諸課題の中から、地域研究コミュニティの要請と助言に基づいて研究テーマを設定し、共同研究を募集しています。

複合研究ユニットや統括班においてテーマごとに研究を統括するとともに、毎年一度、すべての共同研究ユニットが一堂に会して研究の進捗状況を報告しあい、共同研究ユニットの枠を超えた研究連携の場を提供しています。

2. 地域情報学の創出

フィールドで得られる様々な形態の情報を意味がある形で共有化し、横断検索できるようにすることは、地域研究の研究情報や成果の共有に不可欠です。

共有化された地域研究情報を研究に活用するため、地域情報学プロジェクトをおき、特定のテーマに即した統合型データベースの構築や、それを支える各種システムの開発に取り組んでいます。

これらのテーマ別・地域別のデータベースを有機的に統合させ、世界を対象とした「地域の知」データベースの構築を目指しています。



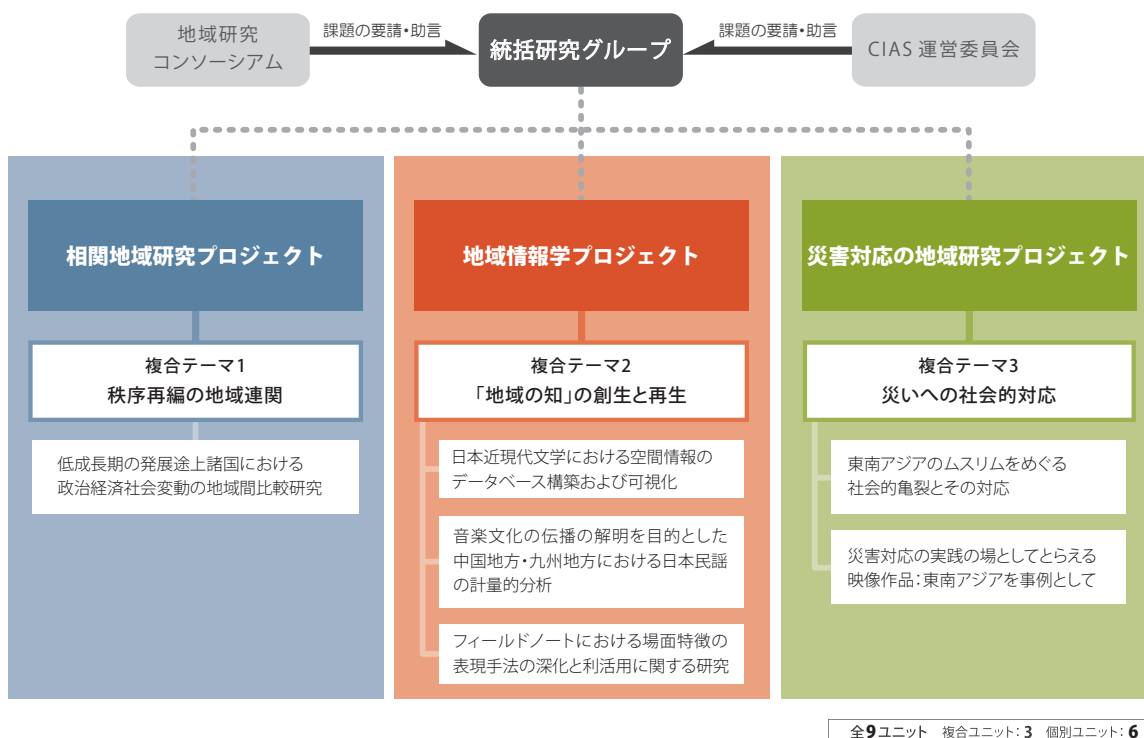


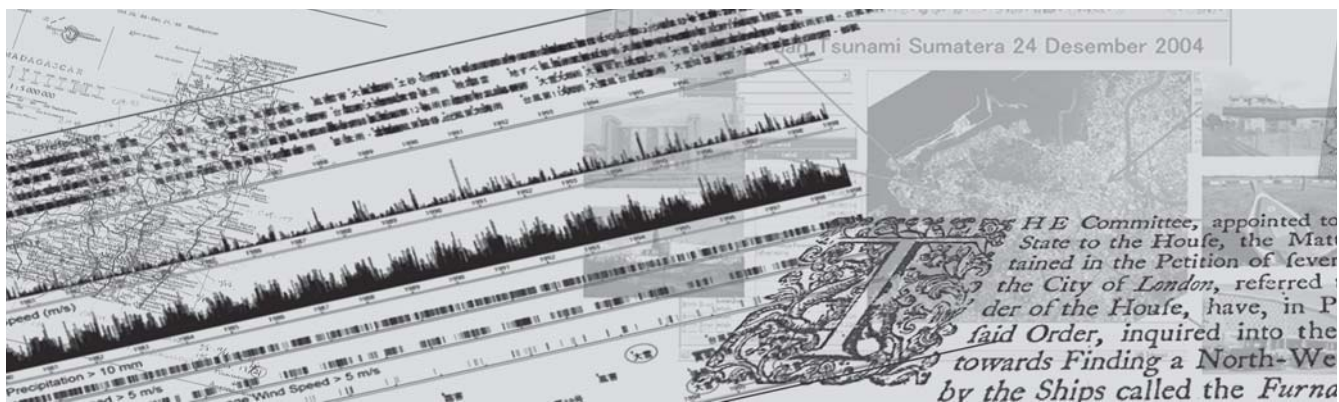
3. 地域研究コンソーシアムの 幹事組織・事務局としての活動

CIASは、地域研究に携わる研究・教育機関や学会・市民団体が加盟する国内最大の地域研究コミュニティである地域研究コンソーシアム（JCAS）の活動を支援しています。

JCASは、97の超える国内外の地域研究関連組織が集まり、現代世界の諸課題に地域研究の立場から取り組むため、組織横断・分野横断的な共同研究の企画・実施、次世代研究者に対する共同研究の企画支援、地域研究の成果発信のための学術雑誌『地域研究』の刊行などを行っています。CIASは、JCASの幹事組織・事務局としてこれらの活動を支援することを通じて、地域研究の活性化や次世代研究者の育成にも取り組んでいます。

2016 年度 CIAS 共同利用・共同研究プロジェクト





CIAS 共同研究プロジェクト

CIAS は、全国の共同利用・共同研究拠点として、国内外の地域研究機関から課題の要請や助言を受けながら共同研究を実施してきました。2016 年度からは過去の実績を受け継ぎながら新たな課題も設定し、3 年計画で「関連地域研究プロジェクト」「地域情報学プロジェクト」「災害対応の地域研究プロジェクト」の 3 つの共同研究プロジェクトを立ち上げています。これらの共同研究プロジェクトにはそれぞれ「秩序再編の地域連関」「『地域の知』の創生と再生」「災いへの社会的対応」の複合共同研究ユニットが対応し、そのもとに合計 6 つの個別共同研究ユニットが配置されています。多様な共同研究ユニットを展開する段階から、その成果を統合し研究プロジェクトの研究テーマを収斂させ先鋭化と深化を図る段階に至り、往年に比べ共同研究ユニットの数自体は少ないものの、CIAS のミッションをより高度に実施するための新しい体制が始動しています。

関連地域研究プロジェクト

複合共同研究ユニット 秩序再編の地域連関

研究期間 2016 年度～ 2018 年度

研究代表 村上勇介（CIAS・准教授）

概要 21 世紀の 10 年代後半を迎える今日、ますますはっきりとしてきているのは、21 世紀世界における秩序について確実な見通しを持つことが困難だということである。前世紀終わりの冷戦終結後、アメリカ合衆国の一極支配の下で進んだグローバル化により「フラット化」するかに見えた世界は、同国のつまずきや中国をはじめとする新興諸国の台頭、市場経済の拡大による格差の拡大、社会の不安定化と非民主主義的な政治の独自性を高めるローカルな動きなど、様々な「グローカル化」の共振によって、「フラット化しない世界」となっている。そうした状況のなかから新たに編み直される 21 世紀世界の秩序はどういうものであろうか。こうした問いに答えることは容易ではないが、本研究は、社会（個人、集団など）、国家、地域・世界のいずれのレベルでも進行している秩序再編の過程を統合的に研究することを縦系に、世界の複数の地域を比較する地域間比較や地域間の連関を分析することを横系にして、21 世紀世界の秩序を考察する手掛かりを探索する。

個別共同研究ユニット 低成長期の発展途上諸国における政治経済社会変動の地域間比較研究

研究期間：2016 年度

研究代表：村上 勇介（CIAS・准教授）



地域情報学プロジェクト

複合共同研究ユニット 「地域の知」の創生と再生



研究期間 2016 年度～ 2018 年度

研究代表 柳澤雅之（CIAS・准教授）

概要 地域に関わる情報、知識、そして知恵を「地域の知」とよぶ。この場合の知識とは地域について人々が調べて知りえた構造化された情報であり、知恵とは地域に生活する人が体験や伝承などを通して得た身に付いた情報である^{注1)}。行政組織や研究機関が蓄積した地域に関わる情報はもちろん、地域に生きる人々がもつ広く深い知識、知恵がそこに含まれる。この知の形は、単なる文字ないし数字などの記号だけではない。画像、音声など様々な情報形態が想定される。また、「地域の知」はすでにある知識だけではなく、膨大な勢いで常に創造される知でもある。本研究では、「地域の知」を地域研究の場で有効活用するための取り組みを対象とする。個々の情報を分断して必要なもののみを取り出して利用する従来の手法ではなく、地域での情報の成り立ちを理解するための包括的な試みや、情報の集積、分析、そして利用までの有機的なつながりを意識した取り組み、新しい地域の知の創造と利用、そのためのソフト・ハード両面における基盤づくりなど、地域の知が創りだされ、新たな資源として活用されるための研究活動を通じ、地域研究における地域の知の活用を考える。

注1) 日本学術会議地域研究委員会の提言『『地域の知』の蓄積と活用に向けて』（2008 年）

個別共同研究ユニット 日本近現代文学における空間情報のデータベース構築および可視化

研究期間：2016 年度

研究代表：工藤 彰（東京大学大学院教育学研究科・特任助教）

個別共同研究ユニット 音楽文化の伝播の解明を目的とした中国地方・九州地方における日本民謡の計量的分析

研究期間：2016 年度

研究代表：河瀬彰宏（同志社大学文化情報学部・助教）

個別共同研究ユニット フィールドノートにおける場面特徴の表現手法の深化と利活用に関する研究

研究期間：2016 年度

研究代表：山田太造（東京大学史料編纂所・助教）

災害対応の地域研究プロジェクト

複合共同研究ユニット 災いへの社会的対応



研究期間 2016 年度～ 2018 年度

研究代表 西 芳実（CIAS・准教授）

概要 国境を越えた人の移動と各国内での都市化の進展により社会的流動性が高まっている今日の世界において、国別に制度化された災害対応では十分に対応できないリスクへの対応が求められているが、世界には地域的・伝統的なものを含めて災いへの対応の様々な経験の蓄積がある。地域差を越えて共有できる標準化された災害対応の仕組みづくりの重要性も念頭に置きながら、そこから零れ落ちる地域や時代によって異なる災害対応の実践の事例を収集し、その意義を検討することを通じて、現代世界にあらわれる多様な災いに社会が対応する際のレジリエンスを高めることを目的とする。

個別共同研究ユニット 東南アジアのムスリムをめぐる社会的亀裂とその対応

研究期間：2016 年度

研究代表：坪井祐司（東洋文庫・研究員）

個別共同研究ユニット 災害対応の実践の場としてとらえる映像作品：東南アジアを事例として

研究期間：2016 年度

研究代表：篠崎香織（北九州市立大学外国語学部・准教授）

地域情報学の構築

世界の諸地域の様子や動向をどのようにすれば捉えることができるのか。これは、人類が自分たちと異なる人々への関心を向けたときから取り組んできた課題であり、グローバル化が進む現代世界ですますます重要性を増している課題です。この課題に対して、学術研究の分野では、統計資料や公文書・手記・新聞・雑誌などの文献資料を使うことに加え、歴史の転換に重要な役割を果たした人物だけでなく、一般の人びとの生活の変化を知るために多くの人からも聞き取り調査をする方法を工夫して、研究資料を収集してきました。

これらの資料や分析方法の重要性は今後もなくなることはありませんが、今日では、世界の新しい状況に対応して、従来の資料収集や分析方法・公開方法に加えて4つの工夫が必要になると考えられます。

1 国境を越えた動きを捉えて提示する

今日では、国境を越えた人や物や情報の動きが容易になり、大量の動きが見られます。従来の国別の情報も依然として重要ですが、国別とは別の枠組みで情報を収集・整理して提示する仕組みも必要です。公文書や統計資料は国別に様式や詳しさが異なっており、そのまま繋げられないこともあるため、様式や詳しさが互いに異なる情報をどのように繋げるかという工夫も必要となります。また、国境を越えて移動し、繋がるヒト・カネ・モノ・情報をどのように捉え、どのように提示するかという工夫も必要です。

2 図画・映像・建築物・音楽などの非文字資料を利用する

統計資料や文献資料は依然として基本的な情報ですが、社会が多様化し、情報技術の発達により様々なメディアが登場したこともあり、図画・映像・建築物・音楽のように従来は各専門分野でのみ使われてきた情報も取り入れて人々の暮らしや考え方を捉える必要があります。これらの資料をどのように処理すれば機械的に検索できるようになるのか、そしてそのような検索により人々の動きや考え方がどのように明らかになるのかは、現代世界を捉える上で重要な課題です。

3 多種多様かつ大量の情報の中から人々の暮らしや考え方を浮かび上がらせる

情報通信とりわけインターネットの発達に伴い、大量のデータが容易に利用可能となりました。ただし、その多くは構造化されていないため、情報量が増えることが対象への理解の促進とは直接結びつきません。また、一時的な情報が多いため、長い時間をかけて解析しても状況が変化してしまつて解析結果が意味を持たなくなることもあります。このような構造化されていない巨大なデータ（ビッグデータ）を短時間に処理し、対象の傾向を大掴みで読み解くことも、今日の社会では多くの分野で必要とされています。

4 研究対象である現地社会の人々が利用できる形でデータベースを作成し、公開する

研究（観察）する側とされる側が明確に区別される時代は幕を閉じ、今日では研究する側とされる側が「地続き」になっています。外部の観察者から向けられた関心や視線がその社会の自画像に影響を及ぼすこともあり、どのようなデータベースを構築するかは、純粋に学術的な関心の問題ではまず、自分と相手を含む社会的な関心とも密接に関わる問題です。データベースの使用言語を英語や現地語にするだけでなく、データベースの設計段階から現地社会と共同で取り組むことも必要となります。

これらの4つの課題に対して必ずしも十分に納得のいく答えが得られているわけではありませんが、CIASは、地域情報学プロジェクトのもと、各スタッフがそれぞれの研究関心に即して具体的な資料をもとにデータベースを作成しながらこれらの課題に取り組んでいます。地域研究者が試行錯誤を重ねながらデータベースを構築しているために手間はかかりますが、上記の4つの課題を技術的に解決することだけを目標にするのではなく、現地社会や研究者を含む利用者にとって意味がある形で利用されるデータベースを目指して模索を続けています。



実験的なものを含め、CIASで作成・公開しているデータベースには以下のものがあります

■研究上の利用とともに、現実社会で専門家や一般利用者にも使えるものとして設計されているもの。スマトラの**災害・復興**、旧社会主義諸国の**選挙・政党**、大陸部東南アジアの**寺院・出家行動**に関するデータベースやシステムがあり、災害・復興に関するデータベースやシステムの一部はすでにインドネシアの防災教育や災害ツーリズムの分野で実際に活用されています。また、寺院・出家行動のデータベースはタイの研究者や仏教団体と共同で研究が進められています。

■世界的に貴重な資料をデジタル化により共有化するもの。「**トルキスタン集成**」、マレー・イスラム雑誌『**カラム**』、タイ語**三印法典**、**貝葉文書**など、当時の時代と社会を知る貴重な現地語資料でありながら、体系的に収集・整理されていなかった資料を収集・デジタル化したデータベースや、CIASが原本を所蔵している**英国議会資料**の利用を助けるデータベースがあります。『カラム』データベースは、マレーシアの国立図書館や言語出版局との共同によりマレーシアの教育で活用されています。

■個人研究者が収集・蓄積した研究資料を整理し、個人研究者の経験や思索の体系化と可視化を試みるとともに、個人研究者の研究情報を共有可能にするもの。**フィールドノート・データベース**や、故石井米雄名誉教授の蔵書を中心とする研究資料を整理した**石井米雄コレクション**があります。布野修司氏の**世界建築**データベースは、書籍とデータベースを統合した先駆的なフィールド・データベースです。中でもフィールドノート・データベースや世界建築データベースは、研究者が記録した時点における学術的にも貴重な情報が含まれるため、地域研究の新たな研究資源としての利活用が望まれ、CIASではそのためのデータベース化を進めています。

■映画、ポスター、建築、音楽など、人々が日常生活の中で見聞きしたり利用したりすることで人々の行動や考え方に影響を与えているものの、従来の研究では十分に利用されてこなかった形態の情報のデータベース。インド、タイ、マレーシアの**映画**、満州国**ポスター**、戦前期東アジア**絵はがき**、**アジア建築**（都市環境文化資源）があります。画像を視覚的に検索したり分析したりする方法や、映画を「物語」として提示したり検索したりする方法が模索されています。

■中国をはじめとする東アジアの現代史に関するデータベース。**20世紀年表**、**中国外国人人口統計**、**北京特別市市政公報**、**上海租界工部局文書**、**中国関係アーカイブ**、**モンゴル人文社会系定期刊行物**のデータベースがあります。

地域情報学プロジェクトでは、データベース作成支援、データベースの統合検索、データの可視化・分析のため、以下のようなシステムやツールを作成・公開しています

■データベース構築支援：データベースに関する専門的な知識や技術を必要とせずに、データベースの構築と公開を実現できる **My データベース**。

■データベース統合：インターネット上に分散しているデータベースの統合検索を目指した**地域研究資源共有化データベース**。

■時空間情報処理ツール：時間処理も可能な地理情報の可視化・分析ツール用 **HuMap** および時間情報の可視化・分析用ツール **HuTime**。

■地域情報学基礎データベース：地域情報学を支える**歴史地名辞書**データベース、暦間の**日付変換ツール**、および**地図**データベース。

■オントロジーツール：語彙の意味・構造に注目してデータを関連付けることにより、資料群を可視化したり検索したりするツールであるトピックマップの研究。その具体例としての、日本図書館協会および国立国会図書館の**件名標目表**、農林水産関連分野の語彙集（**AGROVOC**）、世界各地の民族・社会・文化に関する文献語彙集（**HRAF**）、漫画『**花より男子**』各言語版のトピックマップ。

◆ 以上のデータベースについては、<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/database/> よりアクセスすることができます。



スタッフ

■ 地域関連研究部門

グローバル化の進展のもと、地域間の比較や地域横断的な課題設定による地域研究（相関型地域研究）が求められています。この部門では、国内外の地域研究機関との連携を強化し、地域間の比較研究を軸にした共同研究を推進するとともに、多様な媒体を利用した研究成果の公開を行います。

■ 情報資源研究部門

多様な形態を含む地域研究関連情報を活用する地域研究において、情報資源の概念を深化させ、地域研究コミュニティと研究対象社会の双方

がともに情報資源を共有できるシステムの構築が求められています。この部門では、各地域の情報資源の体系的な収集、その蓄積・加工・発信方策の検討、地域研究情報資源の横断的活用に関する研究を行い、地域情報資源の分散型共有化システムを開発します。

■ 地域情報学 (高次情報処理) 研究部門

地域研究に関する多岐・多様な情報資源を対象に、情報処理の高度化に関する研究を行います。また、情報学的手法を導入して、情報学と地域研究のコラボレーションによる新しい研究パラダイムの確立をはかり、学際領域としての地域情報学の構築を推進します。

■ 国内・国外客員研究部門

相関型地域研究や地域情報資源の共有化、地域情報学の構築のためには、国内外の研究機関との協力・共同が不可欠です。この部門の設置により、国内外の研究ネットワークを拡充します。国外客員研究員については、公募を行っています。

■ 国内客員研究部門

教 授 大矢根 淳（専修大学）
教 授 松田 正己（東京家政学院大学）
准教授 北本 朝展（国立情報学研究所）
准教授 村上 薫（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

■ 特任教員／研究員

教 授 柴山 守
松浦 さと子
助 教 山田 協太
■ 研究員
Andrea Yuri Flores Urushima
原田 真喜子

1 DE JONG, Wil
教授
専門分野
Natural resource governance



4 中山 大将
助教
専門分野
北東アジア地域研究、サハリン樺太史、
農業社会史、移民史



2 帯谷 知可
准教授
専門分野
中央アジア地域研究、
中央アジア近現代史



5 貴志 俊彦
教授
専門分野
日中間係史、東アジア情報・通信・
メディア史研究、移民研究



3 村上 勇介
准教授
専門分野
ラテンアメリカ地域研究、政治学



6 西 芳実
准教授
専門分野
東南アジア地域研究、多言語・
多宗教地域の紛争・災害対応過程





山本 博之

准教授

専門分野

マレーシア地域研究・
イスラム教圏東南アジアの現代政治史、
災害対応と情報、地域研究方法論



柳澤 雅之

准教授

専門分野

農業生態学、ベトナム地域研究



林 行夫

教授

専門分野

東南アジア民族誌学、文化人類学、
宗教と社会をめぐる地域研究



亀田 堯宙

助教

専門分野

情報学（ウェブ、自然言語処理）



原 正一郎

教授

専門分野

情報学



スタッフ

出版物

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/publish/>

研究成果出版物として、叢書「地域研究のフロンティア Frontiers of Area Studies」および CIAS Discussion Paper Seriesなどを刊行しています。また、地域研究コンソーシアム(JCAS)におかれた編集委員会が編集する『地域研究』を年2回刊行しています。

◆叢書 地域研究のフロンティア Frontiers of Area Studies

このシリーズでは、特に地域間の比較や関係性に着目した研究、地域研究にかかわる情報の共有化や地域情報学など、新しい地域研究の開拓を視野にいれた意欲的な研究成果を発表し、地域研究の「フロンティア」を模索する国際発信チャネルとなることをめざします。これまでに和文・英文あわせて9冊の叢書を刊行しています。



村上勇介編／2015年
『21世紀ラテンアメリカの挑戦
——ネオリベリズムによる亀裂を超えて』
※すべて京都大学学術出版会から刊行

◆叢書サブシリーズ 相関地域研究

現代世界が直面する複雑な諸課題に対して、複数地域を横断する広域的な視点から迫ることを狙いとする。記憶の共有と継承、大国の周辺地域から見た世界秩序の再編、多様な価値判断や「正義」の間の調整という三つのテーマについて、地域間の相関関係を踏まえて地域の特徴を明らかにすることで、現代世界の諸課題に取り組む各地域の実践の総体を描いています。



第1巻 貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編著／2015年
『記憶と忘却のアジア』
第2巻 村上勇介・帯谷知可編著／2015年
『融解と再創造の世界秩序』
第3巻 谷川竜一・原正一郎・林行夫・柳澤雅之編著／2016年
『衝突と変奏のジャスティス』
※すべて青弓社から刊行

◆叢書サブシリーズ 災害対応の地域研究

「災害対応の地域研究」(全5巻)は、対象地域を時間と空間の広がりの中で立体的に捉える地域研究の方法により、被災後だけ、被災地だけにとどまらないこれからの災害対応のあり方を提示するとともに、災害(災い)を社会の潜在的な課題が顕在化する契機と捉えて検討することで、地域社会への理解を深めることを狙いとしています。各巻は地域研究、防災、人道支援、情報学など分野の異なる専門家の協働により執筆されています。



第1巻 山本博之著／2014年
『復興の文化空間学
——ビッグデータと人道支援の時代』
第2巻 西芳実著／2014年
『災害復興で内戦を乗り越える
——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』
第3巻 牧紀男・山本博之編著／2015年
『国際協力と防災——つくる・よりそう・きたえる』
第4巻 川喜田敦子・西芳実編著／2016年
『歴史としてのレジリエンス——戦争・独立・災害』
第5巻 清水展・木村周平編著／2015年
『新しい人間、新しい社会——復興の物語を再創造する』
※すべて京都大学学術出版会から刊行

◆ブックレットシリーズ 情報とフィールド科学

現実世界を捉えるために多様な情報をどのように整理し読み解くかという方法論を、アジア映画、イスラム雑誌、建築(灯台)、災害報道・被災地調査というように具体的な情報処理の現場を設定して、それぞれの読み解き方を示しています。主に大学の新生向けの研究生活ガイドとして活用されることが期待されています。



第1巻 山本博之著／2015年
『映画から世界を読む』
第2巻 谷川竜一著／2016年
『灯台から考える海の近代』
第3巻 山本博之著／2016年
『雑誌から見る社会』
第4巻 西芳実著／2016年
『被災地に寄り添う社会調査』
※すべて京都大学学術出版会から刊行



◆ CIAS Discussion Paper Series

CIASの教員や研究員の研究成果や共同研究の成果を公開するCIAS Discussion Paper Seriesを刊行しています。論文のみならず、調査報告、資料、文献解題、ワークショップやシンポジウムの記録など多彩な研究成果を、随時刊行しています。2016年10月1日現在でNo.66まで発行しました。詳しくは本要覧付録の冊子またはCIASホームページをご覧ください。CIASホームページにはPDFファイルをダウンロード可能なDiscussion Paperもあります。



◆ 雑誌『地域研究』

学術雑誌『地域研究』は、地域研究の視点から世界の課題を考える特集と個別論文によって構成されています。特集と論文は公募されており、編集委員会による審査・査読を経て採否が決定されます。



Vol. 16 No. 1 / 2015年11月
総特集 ロシアとヨーロッパの狭間
——ウクライナ問題と地域史から考える
Vol. 16 No. 2 / 2016年3月
総特集 中口の台頭と欧米覇権の将来
※すべて昭和堂から刊行

図書室

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library/>

およそ5万2千（2016年3月末現在、マイクロフィッシュ等を含む所蔵ID数）の蔵書を有しています。

冊子体としての蔵書は、現地収集方式を積極的に活用しながら蓄積されてきた現地語による同時代的資料と基本文献があげられます。特に、中東、ラテンアメリカ、中央アジアの3地域を対象とするユニークなコレクションがあります。

国内で収集されたものとしては、世界の諸地域の近現代のさまざまな問題を考察するために重要な米・英・旧ソ連の外交・政治文書や国際関係分析資料などの一次資料、諸地域の新聞コレクションなどがあります。紛争、復興支援、移民、ジェンダー、旧日本植民地といった研究テーマにそくして収集されたものも重要な資料群となっています。また、政治学や国際関係論の分野を中心とする欧文雑誌バックナンバー、希少価値のある地図、現地との協働により得られた希少資料のデジタル複製版なども所蔵しています。

京セラ文庫「英国議会資料」

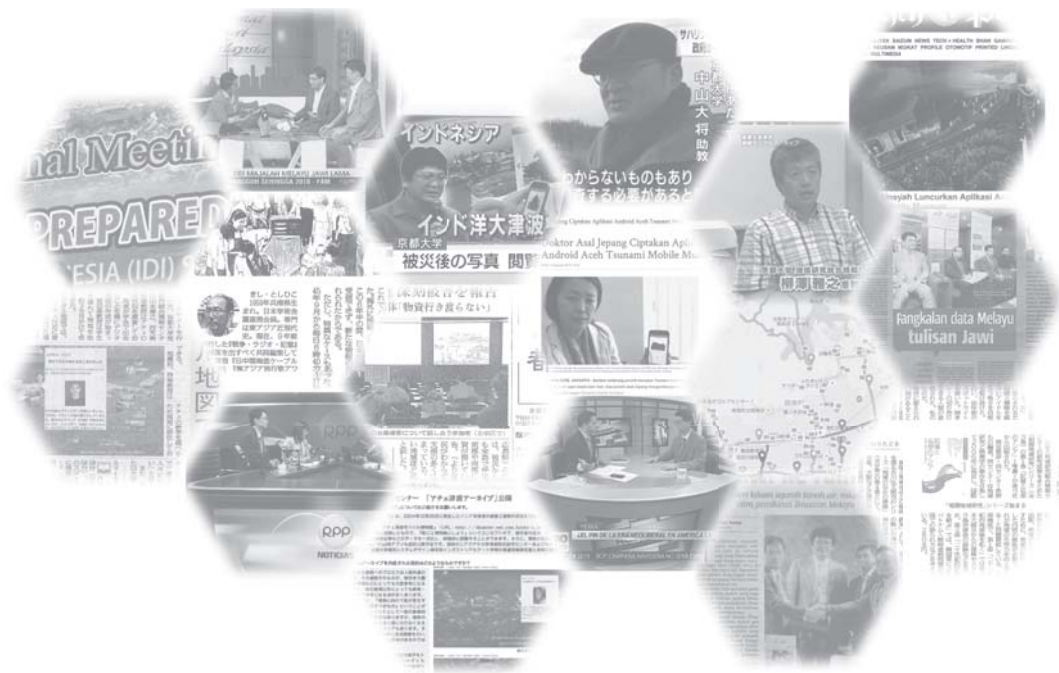
(BPP: British Parliamentary Papers)

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library/about/bpp.html>

英国議会に提出された各種文書（下院文書1801年～1986年、上院文書1801年～1922年）を集成した総冊数約1万3千冊の資料集成です。

旧イギリス商務省が所蔵していたこの資料集成は、1998年3月に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター（当時）に寄贈され、その後、2006年の同センターの組織再編にともない、この文庫も「京セラ文庫『英国議会資料』」として京都大学に移管されることになりました。

19世紀から20世紀という激動の時代に、イギリスが世界各地から同時代の眼で集積編纂した情報庫である英国議会資料は、多くの分野の基礎的研究資料として活用されてきています。近年、デジタル検索ツールやオンライン版も開発され、膨大かつ多様な内容をもつ同資料を縦横に渉猟することも可能となりました。地域研においても、同資料の地図・図版データベースを作成するなど、情報学を活用した新しい利用・公開方法を提案しています。



情報発信

CIAS は、ウェブサイト (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>) やニューズレター等を通じて、同センターが主催・共催するシンポジウムや各種研究会等の活動、また図書ならびに映像資料等の所蔵、データベース公開に関する情報提供を行っています。CIAS の各種出版物については、デジタル・アーカイブ化により、ウェブサイト上で公開を行っています。また、新聞・雑誌の取材を受けたり、テレビ・ラジオ等に出演したりした CIAS の教員や研究員等の記事（カッコ内に名前を記載）は以下のとおりです。



2016 年 1 月

「私たちはどこへ戦後 70 年 第 11 部 責任③ 遠い祖国」『大分合同新聞（ほか各地方紙、共同通信社配信）』（中山）

「あの日神戸は 阪神大震災 市がデータ公開 アプリ開発進む」『読売新聞』（西・山本）

2016 年 3 月

「比映画 3 作品を上映 最優秀は韓国、比勢入賞逃す 大阪アジア映画祭」『まにら新聞』（西・山本）

「首都圏で 2 団体の防災に関する国際会議が開催され、災害支援などについて議論」『まにら新聞』（西・山本）

2016 年 6 月

NEWS OF THE WEEK FLASH! 「ペルー大統領選 僅差でフジモリ氏敗北 資金洗浄疑惑で反発」『週刊エコノミスト』（村上）

「ペルー大統領選『女性初』なるか 識者に聞く」『毎日新聞』（村上）

2016 年 9 月

「宗教対立と仏教 発表と討論 愛知・豊橋でワークショップ」『毎日新聞』（林）

「樺太の慰霊碑 国調査へ 約 20 カ所今後の管理法検討 出身者高齢化で維持困難」『北海道新聞』（中山）

「次世代の戦後記憶と表現 仏教の南方進出 閉ざされた史実に光」『毎日新聞』（林）

「経済格差 ペルーから解決策探る」『朝日新聞』（村上）

2016 年 10 月

「戦下の中国、写真宣伝戦 国策会社・華北交通の沿線 京大に 3.5 万枚」『朝日新聞』（貴志）

「政府のサハリンの日本人慰霊碑初の現地調査」NHK 国際ニュース（中山）



センター設立の経緯

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）の原型は、1994 年、国立民族学博物館に設置された地域研究企画交流センター（民博地域研）にあります。

また、京都大学では、東南アジア研究所と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が、「地域研究統合情報化センター」を両部局の協力のもとに学内に設置する構想を温めてきました。

一方、世界各地を対象とする我が国の地域研究関連研究機関のあいだで、さまざまな地域を横断的に比較研究する相関型地域研究や地域研究情報資源共有化の必要性が認識されるようになりました。こうした中、2004 年 4 月、全国の研究教育機関等が加盟する地域研究コンソーシアム（JCAS）が設立されています。

こうした地域研究コミュニティの連携を背景に、地域研究の一層の発展方策を検討する必要が高まってきました。また、大学法人化という研究組織の大きな再編を経て、民博地域研の全国共同利用機能をさらに発展させることも検討課題となってきました。

上記の経緯を踏まえ、2006 年 4 月、地域研究コンソーシアムなど地域研究コミュニティに開かれた活動を行う全国共同利用施設として、京都大学に地域研究統合情報センターが設置されました。

京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Email : ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp
Tel : 075-753-7302
Fax : 075-753-9602

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

